

表現・創作活動を通して学ぶ狂言

－小学校における「くさびら」の指導実践の考察－

Learning of Kyogen (Traditional Japanese Comic Drama) through Expression and Creative Activities
－A Study of the Educational Practice of Kyogen “Kusabira” at Elementary Schools－

吉瀬 千代 嶋田 由美
KICHISE Chiyo SHIMADA Yumi
(紀の川市立鞆渕中学校) (和歌山大学教育学部)

抄録：

本研究は狂言の側面から小学校における日本の伝統芸能の指導を考えていく道筋をつくることを目的として開始されたものである。狂言には、話の筋が理解しやすい、上演時間が比較的短い、セリフの抑揚を真似るだけで狂言風に聞こえる、特別な舞台装置が必要ないなどの点で、学級で取り組む伝統芸能としての利点がある。中でも「茸（くさびら）」は、ストーリーの面白さや茸の独特な歩き方が子どもにも受け入れられやすいと考え、小学校3年生を対象に全17時間を使った狂言「茸」の指導を計画し、学級全員で演じる活動を行った。本報告はその指導内容を詳細に検討し、そこから伝統的な言語文化の活動に資する狂言教材の可能性を探ることを目的とするものである。

キーワード：狂言、「茸」、伝統芸能、「構エ」、「運ビ」

1. はじめに

日本を代表する伝統芸能に能・狂言・文楽・歌舞伎がある。これらの芸能は、年々専門家による鑑賞教室やワークショップの企画がすすめられ、老若男女を問わずあらゆる人々にとって興味・関心がもたれやすいものとなってきた。しかし、一方で本物の舞台を鑑賞したことがないにもかかわらず、先入観から「日本の伝統芸能は難しい」という考えを抱いている人々が多いのもまた事実である。

そのような中で、中学校や高等学校の教科書に日本の伝統芸能が掲載される頁数は、教科書改訂ごとに増し、一見、生徒は日本の伝統芸能の魅力を知る機会に恵まれるようになってきたかのようである。しかし、現段階において、教師の多くがこれらの芸能に関して知識・経験不足であるため、学校現場では日本の伝統芸能のよさを十分に伝えきれていないのが実状である。

2006年12月改正の教育基本法の改正理念を踏まえ、2008年1月17日に出された中央教育審議会答申では、改善事項として「伝統や文化に関する教育の充実」が盛り込まれた。そして、同年3月に告示された新学習指導要領では、中・高等学校のみならず、小学校においても伝統と文化を尊重し、個性豊かな文化の創造が求められるようになり、特に、国語科では、どの学年においても「伝統的な言語文化に関する事項」が加え

られ、発達段階に応じて、「読み聞かせを聞く」「発表し合う」「内容のたいを知り、音読する」といった言語活動を通じた指導の必要性が明記されている。これを受けて、平成23年度から使用の国語科教科書には、狂言「柿山伏」（光村図書 6年）や「附子」（教育出版 5年）などが読み物教材として掲載されている。しかし、実際に狂言を鑑賞したことのない多くの教師にとって、指導書を頼りに授業を行うだけでは狂言の本質的なおもしろさを児童に伝えることは難しいことであろう。

このような状況の中で筆者らは数年前より小学校における日本の伝統芸能の扱いについて実践を踏まえながら検討を行ってきたが、その結果、狂言は、読み物教材として扱うより、実際に演じ体験する方が狂言そのもののおもしろさを伝えることができるのではないかと考えるに至った。ところで、独特の難解な言葉づかいから、狂言の指導の対象としては一般的には高学年が考えられがちであるが、表現という観点からは、羞恥心の芽生えにより、生き生きとした身体表現への抵抗感を感じ始める高学年よりは、真似ることを得手とする低・中学年の方が望ましいのではないかと考えた¹⁾。このような時期に狂言特有の節回し、セリフの掛け合い、力強い発声などの体験をすることによって、狂言の面白さを全身で感じ取り、そこに生涯にわたって伝統芸能に親しむための素地を作ることができるのではないと思われる。

本実践は、このような趣旨から、創作活動を採用しながら自ら演じることにより、言語・身体・創作活動を通して総合的に狂言を捉え、狂言のおもしろさを感じさせることをねらいとして行った指導実践の報告である。そして、この実践の考察を通して、小学校における総合的な表現活動としての狂言指導の可能性を探ってみたいと考える。

2. 狂言の教材としての可能性

日本の伝統芸能の指導を考える中で、狂言を選択した理由として、他の芸能にはない狂言そのものが持つ特性から導かれる教育的効果が挙げられる。狂言には、内容がシンプルで話の筋が理解しやすく上演時間も短い、節回しや動きがおもしろく模倣しやすい、人間の誰もが持っている性質をおもしろおかしく表現している、特別な舞台装置がないのでむしろ想像力が高められる、などの特性がある。これらの個々の特性は、通常の学級内での限られた時間数の指導の中で児童と作品を創り上げていくのに対応し得ると考える。

ところで本実践では数多くの狂言曲の中から「茸」²を選択したが、それは下記の諸点によりこの演目が、教材曲として適していると判断したからである。即ち、

- ①ストーリーがシンプルで上演時間も短い。
 - ②山伏が茸を退治しようと何度も呪文を唱えるが、減るところか、反対にどんどん増えていくところがおもしろく、子どもに受け入れられやすい。
 - ③茸の歩き方が独特である。
 - ④登場する茸の数が多いので、クラス全員で演じることができる。
 - ⑤茸の狂言面の制作を楽しむことができる。
- という点である。

3. 狂言「くさびら」の指導

本実践は、第3学年を対象とし、狂言「茸」を表現活動として扱い、全校集会で発表するまでに至った取

り組みである。この学年を対象とした理由は、低学年より模倣に優れ、理解力が高く、脚力を伴う山伏や茸の所作がスムーズに行えると考えたからである。また、台本については、3年生の発表を鑑賞する他学年の児童にもわかりやすいように、セリフの省略や加筆を行い、上演時間約10分の発表用台本を作成し使用した。

3. 1. 授業の実施方法

概要：

対象：紀の川市立調月小学校 第3学年

(男子11名 女子7名 計18名)

授業実施期間：2010年5月31日(月)～7月2日(金)

実施場所：同校内3年教室・多目的教室・体育館

指導者：音楽専科教諭

学級担任教諭は第15回授業のみ担当

教材曲：狂言「くさびら」³

使用教材：

- ①絵本『狂言えほん くさびら』(もとしたいづみ作 講談社) (写真1)



写真1)『狂言えほん くさびら』の表紙

- ②発表用台本「くさびら」(資料1)

- ③DVD『狂言でござる』(『野村万作狂言集』第1巻 角川映画) (「茸」上演時間22分)

鬼山伏狂言 くさびら	
登場人物 シテ 山ぶし アド 男 アト くさびら	
男 ①	このあたりの者でござる。わたしのやしきに、くさびらが出ましたにござる。取りすてござれば、一夜のうちに、また、ものごとく、上がります。さいきん、取りすてますれども、おいおい、大きゅうなつて、上がりますにござる。何やら、心にかかって、悲(あ)しゅうござる。山に、行方(こうりき)の強い、山ぶしがござる。まいって、うらのうて、もらおうと、ぞんず。まず、そりそりりと、参ろう。
山伏 ①	(歩き出し)「語り手」そう、うて、男は、山に、はいっていきました。(、取りして)イヤ、何かと申すうちに、(こじや。まず、あんないを、こおろ。ものもち。あんないもち。
男 ②	あんないを、もうさんと、言は、だれぞ、私でござる。
山伏 ②	そなたならば、あんないに、およぼうか
男 ③	これは、ありがたい。わたしのやしきに、大きなくさびらが、出ましたにござる。取りすてますれども、おいおい、大きゅうなつて、ト、ぞ、うらのうて、くさびらを、たいこして、くだされ。
山伏 ③	わたしもいそがしいが、そなたのことしや、して、やあうぞ。それは、ありがとうぞんず。それならば、まいりましよう。(歩き出す)

資料1)「くさびら」の発表用台本(全3頁)の一部

表1 狂言「くさびら」の指導計画

	実施日	教科	場所(※1)	学習の流れ	授業内容
1	5/31(月)	総合	2教室	①導入 (動機付け)	読み聞かせ1・ワークシート
2	6/3(木)	音楽	2教室		読み聞かせ2・グループによるワークシートの寸劇
3	6/8(火)	音楽	2教室	② 響きのある声づくり 約120分	口形練習・発声・1頁(※2)を復唱
4	6/9(水)	総合	2教室		口形練習・発声・1頁を復唱・2頁読み聞かせ
5	6/11(金)	音楽	3年教室		(授業参観)口形練習・発声・全頁を復唱・面作り
6	6/15(火)	音楽	3年教室		口形練習・発声・1~2頁を復唱・面作り仕上げ
7	6/16(水)	総合	3年教室		口形練習・発声・全頁を群読・役とセリフの希望集約
8	6/17(木)	総合	3年教室		口形練習・発声・全頁を群読・役と担当セリフの決定 DVD一部視聴・くさびらの所作練習
9	6/22(火)	音楽	3年教室		③ 立ち稽古 約90分
10	6/23(水)	総合	3年教室	全頁を群読1回・2~3頁の立ち位置確認と立ち稽古1回	
11	6/24(木)	総合	3年教室	全頁を群読1回・1~2頁の立ち位置確認と立ち稽古1回	
12	6/25(金)	音楽	3年教室	DVD全視聴・ワークシート・立ち稽古通し1回	
13	6/28(月)	総合	体育館	④ 舞台稽古 約150分	全頁を群読1回・舞台稽古1回
14	6/29(火)	音楽	体育館		舞台稽古2回・小道具作り(男役は腰帯・山伏役は頭襟)
15	6/29(火)	図工	3年教室		葺の笠制作・面の切り取り
16	6/30(水)	音楽	体育館		舞台稽古2回
17	7/1(木)	総合	体育館		同役同士でセリフの稽古・舞台稽古2回
7/2(金) ⑤成果発表(七夕全校集会)					

※1 2教室とは、多目的教室と3年教室。

※2 指導者が指導用に編集した「くさびら」の発表用台本(全3頁)の1頁を示す。

表現活動の流れと指導の目的：

指導計画の詳細は表1の通りである。全17時間の内訳は、総合的な学習の時間8時間、音楽8時間、図工1時間である。

①表現活動への導入(動機付け)〈多目的教室〉

狂言セリフによる狂言絵本の読み聞かせで、興味を持たせる。

②響きのある声づくり(口形・発声・発音練習)とセリフの稽古〈3年教室・多目的教室〉

発声・発音のために必要な身体の使い方(姿勢・呼吸・唇の筋肉運動・舌の脱力)を身につけ、響きのある声を出すことを目指す。セリフの習得は、伝統的な模倣を繰り返し、セリフの節回しや掛け合いのリズムも含め包括的に体得させていく。指導者は、これらすべてを「型」として扱い、模倣させる。

③立ち稽古〈3年教室〉

役柄にあった「構エ」や「運ビ」を身につけ、動きは、セリフと合わせて稽古し、身体化させていく。DVDを視聴し、所作の動きを洗練させる。

④舞台稽古〈体育館〉

セリフの間も含め、一連の流れを「型」の連続として演じられる緊張感を生み出す。

⑤成果発表〈体育館〉

発声と狂言の指導法について：

本実践では、可能な限り日本の伝統的な発声法と学習方法を取り入れたいと考えた。そこで児童には、発声法については、「母音を丁寧に発音し、息は深くお腹の底まで吸い込んで、声は胸に響かせながら、まっす

ぐ前に出す」という趣旨で、腹式呼吸法による胸声発声を中心として指導した。具体的には、声を出す直前にたっぷり息を吸い、呼気に乗せて響きのある声を出せるような指導である。

次に、狂言の指導法については、口伝を基本としながらも児童にわかりやすい言語表現で教授を進め、繰り返し模倣させた。但し、児童が演唱を誤った場合、指導者は再び規範を提示し、児童自らにフィードバックを行わせ、指導者が示す規範に近づけさせた。

制作物について：

演じるだけでなく、狂言に対する興味・関心を深め、記憶に残る取り組みになるように、山伏の頭襟・男の腰帯⁴(写真2)・葺の面と傘(写真3)の創作活動を採り入れた。



写真2) 男の扮装：腰帯・扇子



写真3) 茸の面と傘

その他の小道具について：

児童が制作した上記以外に次の小道具を用意した。
山伏の数珠・男の扇子・おばけくさびら⁵の傘（唐傘使用）・ギロ（山伏の数珠を擦る音）・団扇太鼓（山伏の呪文のリズム）・椎茸、舞茸、しめじ茸、姫茸役用の手袋（鍋つかみ使用）

3. 2. 実践内容の考察

3. 2. 1. 表現活動への導入（第1～2回授業）

本実践の導入として、狂言「くさびら」に親しみ、狂言ゼリフに慣れるために、『狂言えほん くさびら』の読み聞かせを行った。言語は、すべて狂言ゼリフで、「2字目を張る」⁶ことを意識し、節回しも真似て行った。児童は、終始無言で真剣に聞いていた。最後の頁を閉じて裏表紙を見せるとすぐに児童から「絵本の言葉と全然違った」「くさびらってきのこのこと？」「きのこのって家に生える？」「ポーロンボロの回数が違った」などの発言が聞かれた。そして、繰り返し現れた山伏の呪文である、「ポーロンボロ」を指導者の節回しとそっくりに謡っており、すでに習得している様子が見受けられた。また、「2字目を張る」ことや聞き慣れない狂言ゼリフを意識して語ったにもかかわらず、児童からはゼリフの意味に関する質問は無く、狂言風のしゃべり⁷は、一度の読み聞かせで児童に自然に受け止められていたと考えられる。

その後、ワークシートに、一番印象に残った場面を絵とゼリフで自由に表現させた。その結果、18人中16人が茸が登場している場面を描き、その中の15人の児童が、印象的な目と舌を出した「おばけくさびら」が登場する場面を描いていたが（資料2）、ここからある程度、話の構成の山場が捉えられていたことが分かる。

第2回では、ゼリフ劇の楽しさや難しさに気づかせることを目的として、「面白かった場面のゼリフ劇」を発表する場を設けた。ここでは3人1組で、発表する作品を1つ選び、役を決め、10分程度の練習の後、順に発表させた。この発表では、これから取り組む舞台発表に向けて必要とされる台本作成・役決め・練習・発表のすべての過程を圧縮した形で短時間のうちに体験することができた。

役やゼリフに合わせて声を作り表現できている児童や、ゼリフに抑揚や長短をつけて表現している児童が目立ったが、これらは、指導者の読み聞かせから自然に習得されたと思われる。とりわけ、「2字目を張る」



資料2) 児童が描いた絵「おばけくさびらがでてきたところ」

という狂言特有の節回しができていたことから、真似ることの得意な学年で表現教材として狂言を扱うことの可能性が感じられた。

3. 2. 2. 響きのある声づくりとゼリフの稽古（第3回～第8回授業）

狂言の稽古は、通常、狂言謡を口写して覚えることから始められるが⁸、今回は、限られた期間で狂言を演じ発表しなければならないため、発音に必要な口形や発声の練習から始めた。はじめに、「あいうえお いうえおあ うえおあい えおあいう おあいうえ」を一息で発音し、唇の筋肉をほぐしていき、これを2回、3回と続けて一息で発音練習させた。初回は、唇の筋肉をうまくコントロールできず、発音があいまいであったが、児童は、スピードとスリルを楽しみながら、何度も練習を繰り返し、徐々に強い声で明瞭に発音できるようになった。合わせて、たくさんの息を吸い込んで発音できるようにもなっていった。

その後、狂言「くさびら」のゼリフの稽古に入った。指導法は伝統的な「模倣」で、初回時は、児童には台本を見せず、指導者の口元や声に目と耳を集中させ、指導者のしゃべるゼリフを復唱させた。その際、指導者は、「口形を意識して強い声でしゃべる」「2字目を張り、拗音や長音を充分にのばす」ことを意識してしゃべり、狂言の様式を「型」として伝えた。

狂言「くさびら」のゼリフは、8日前行った読み聞かせで一回聞いただけであるが、児童は、自然な強い声でゼリフをしゃべり、音の高低や長短もそのまま模倣し、教師の手本をうまく真似ることができていた。発音も明瞭で、「私の屋敷に、大きなくさびらが出ましたによって」というような長いゼリフも1回で復唱できた。また、「大きゅうなって」「悪しゅうござる」などの拗音や、「占のうて」「参ろう」などの長音は唇の筋肉を意識して丁寧に発音しており、一度の復唱で狂言ゼリフを包括的に捉えてしゃべることができていたのが印象的であった。

台本1頁目の「道行」の説明として、教師が能舞台

をイメージして歩きながら、舞台を一周すれば、どのような遠いところへでも到着することを話すと、児童は、想像力を膨らませ、「瞬間移動？すごい」と言う表現で狂言の約束事に興味を示した。

また、2頁目の「申し申し」というセリフの稽古を行った日の授業終了時には、すでに友達に「申し申し」と呼びかけている様子が見られ、狂言のセリフをさまざま生活場面で活用し楽しんでいるようであった。

第5・6回では、茸の面作りを行った。児童は色画用紙を自由に選び、思い思いの面を創作した。第1回で描いた「一番おもしろかった場面」には、「おばけくさびらが出たところ」が多かったが、本時の茸の面作りにも、おばけくさびらを描く児童が多く見られた。女兒の中には、かわいい姫茸をイメージして描いている児童も数名いた。制作中、児童は、「ホイホイ」、あるいは、「くさびら、かわいい」などと言いながら、楽しんで面を完成させていった。劇中では、茸は人間にとって、とてもやっかいな存在として描写されている。しかし、観る側にはそのような印象は与えられず、児童にとって茸はむしろかわいい存在であり、演じることにより、更に愛着が湧いてきているのが伝わってきた。

第6回では、すでにセリフを完全に覚え、自信を持って強い声で発音できる児童が増えてきた。児童は、「2字目を張る」ことや、山伏と男のセリフの掛け合いのリズム、拗音や長音を充分にのばすことに注意しながら、教師のセリフに合わせてしゃべった。セリフの練習を宿題にはしなかったが、第5回の授業参観で家庭用に発表用台本を配布してあったため、児童の多くは、自宅で自主的に稽古をしているようであった。このように、児童が、狂言「くさびら」に興味を示し、自ら稽古に励み、「精進」していく姿からは、伝統的な学び方の一端が児童の中に根付きつつあることが感じられた。

第7回時に配役とセリフの希望を取った。配役は、茸と、山伏か男かのどちらかを演じ、台本の頁ごとに交替して全員二役とした。この頃にはセリフが身体に入り、演技のイメージも膨らんできたようで、児童は「ポーロンポロを言いたい」あるいは「エイエイ、ヤットナを言いたい」というように、積極的に希望の役を言うようになっていた。児童が一番関心のある役は、様々な茸であり、何人もの児童がおばけくさびらや姫茸をやりたいと名乗りを挙げた。

第8回では、立ち稽古に入る前に、児童全員に茸の歩き方を練習させた。最初に、DVDを部分視聴させ、茸の歩き方の特徴を捉えさせたが、児童は、座りながらも両手を胸につけて動かさずに背筋を伸ばし、つま先で早く歩くという独特な歩き方に着目し、その歩き方を真似た。最初はなかなか足が前に出ず、転ぶ児童が続出したが、転びながら何度も繰り返し歩き続け、少しずつコツをつかみ、一人また一人と徐々に歩けるようになった。児童はこの所作に大変興味を示し、授業終了のチャイムが鳴っても、茸の歩き方を楽しんで

いた。

3. 2. 3. 立ち稽古（第9回～第12回授業）

立ち稽古をするにあたって教室後方に、実際より少し狭い能舞台（橋掛りと本舞台）の枠を作った。

立ち稽古では、まず、山伏と男の歩き方を説明し、指導者が歩いて見せた。すると、何人かの児童が立ち上がり、山伏の歩き方を真似て歩きだした。さらに、口形・発声練習の時も、歩きながらセリフの稽古に参加する児童の姿が見られた。

立ち稽古は、セリフは全員でしゃべり、それぞれの立ち位置と移動の共通理解を図りながら進めた。児童は、初回から他の児童の動きに合わせて、非常に熱心に稽古をすることができた。セリフについては、声に集中できないため、まだ強い声で発音することはできないが、「構エ」や「運ビ」に意識を向けながら、他の児童の声に合わせてしゃべることができていた。

第12回では、全体のイメージをつかませることと、それぞれの役の「構エ」や「運ビ」の特徴を確認させることをねらいとして、狂言「茸」のDVDを視聴させた。この曲は、全視聴に22分かかり、狂言をあまり知らない通常の3年生であれば鑑賞中に集中力が途切れることも懸念されるであろうが、本実践の対象児童は、それぞれの役がどのように演じられているのかを確認するという視聴目的が明確であることから、最後まで集中して視聴することができた。

姫茸が左右に飛びながら独特な声を出して退場する最後の場面は児童にも大変印象的であったようであり、すぐにその鳴き声を真似ようと声色をさぐりながら声を出す児童の姿が多く見られた。

DVD視聴によりそれぞれの所作を確認し、最後の立ち稽古を行ったが、児童の所作は、前時よりはるかに狂言らしい「構エ」と「運ビ」に近づいていた。特に、山伏の足が一瞬で揃ってよく上がるようになり、次にその足をゆっくり下ろしてもバランスがとれるようになった。また、わずかではあるが、歩き方に序破急をつけ演じられるようになった。

立ち稽古は、全部で3回しか通すことができなかったが、児童は一度で約束事を身体化させていった。このような児童の集中力と演じることへの関心の高さは、当初の教師の予想を遥かに越えるものであった。

3. 2. 4. 舞台稽古（第13回～第17回授業）

第13回から、体育館で舞台稽古を始めた。本来能舞台は6メートル四方であるが、演者が児童であり、体格が小さいことや歩幅が狭いことを考慮して、今回は四方を1メートルずつ縮小し5メートル四方の簡易能舞台を見立てて、フロアに黒のテープを貼った。

「摺り足」で歩く速さは、普段の歩行よりかなりゆっくりであるが、児童はこのスピードに随分慣れた様子であった。また本時より、男役に扇子を持たせたことにより、「構エ」が少し安定し、「運ビ」のぎこちなさは少なくなった。一方、山伏役には数珠を持たせたが、数珠を擦る音が弱いので、効果音としてギロを使用し、そこに山伏の呪文のリズムとして団扇太鼓を合わせ

た。ギロは3年担任が、団扇太鼓は指導者が担当し、地謡座に座り、山伏の呪文である「ポーロンボロ」を4回唱えている間、声に合わせて楽器を鳴らしたが、ギロと団扇太鼓の音色は、数珠を擦りながら呪文を唱えている場面によく映えた。

通常速くなりがちなセリフも、全員で声を合わせることによって、ゆっくりとしゃべることができ、狂言らしくなってきた。しかし、全員でしゃべると、誰のセリフなのかわかりづらいため、第14回からは、演者だけでセリフをしゃべることにした。

第15回では、茸の傘の制作と面の切り取りを行った。指導者は、茸役を演じる時、自分の作った面をかけて、その面から覗いて見える世界を感じてほしいと願っていたが、面をつけての演技が非常に困難であることがわかった。そこで、狂言を演じるフロアの後方にある体育館の舞台の上に児童全員の茸の傘を並べ、舞台前面に児童が制作した面を貼りつけた。そして、児童が茸として登場するとき、自分の傘をかぶった瞬間に茸になるという演出を行った（写真4）。



写真4) 茸役として登場する時、傘をかぶる

稽古では、セリフ、「構エ」、「運ビ」、間、次の準備などをすべて「型」として意識し、身体化してきた。

このように、狂言の様式に則った稽古であったが、徐々に狂言の約束事を演じきろうとする児童の意識が高まり、第16回の舞台稽古からは、児童同士で動きの不便さを確認しながら打ち合わせをし、自主的に立ち位置を交替するなどの主体的な行動が確認された。さらに舞台稽古終盤では、児童は周りの動きを考慮し、全体の中で自分はどのように動き、表現すればいいのかを考え、納得しながら狂言を仕上げた。

3. 2. 5. 成果発表（平成22年7月2日）

狂言「くさびら」の成果発表は、七夕全校集会で行われた。

3年生以外の観客である児童は、狂言について予備知識がないため、狂言発表の前に、狂言、能舞台、登場人物、演者が身につけているもの、あらすじについて指導者が簡単な説明を行った。

本番は、橋掛りから男が摺り足で登場した後、聞き慣れない狂言セリフで芝居が始まり、次に山伏が独特

の「構エ」と「運ビ」で登場し、対話劇に入ったが、観客はすでに狂言のゆったりとしたペースに引き込まれ、見慣れぬ「型」の連続に釘付けとなった。低学年の児童は、セリフを聴きながら時折笑みを浮かべて観ていたが、4年生以上の児童には演じている3年生の緊張が伝わったのか、最後まで集中して真剣に鑑賞していた。

3. 3. 狂言「くさびら」の実践の考察

児童は、はじめは教師の教示を守り、ただひたすら「型」を仕上げることを繰り返していたが、次第に児童自身で考え、改善し、少しずつ自分たちの狂言に仕上げていった。これは、指導者自身も予想もなかったことである。3年生でも、一連の流れを身体化していけば指導の枠を超えて自分達で創り上げていく力があるということが確認できた。

狂言独特の言葉づかいに関しては、本実践対象の児童からは、絵本の読み聞かせやセリフの稽古の段階でも、「言葉が難しい」という発言は聞かれず、導入の段階からごく自然な形で狂言そのものに向かうという道筋を辿れたのではないかと考える。一方、3年生の狂言を鑑賞していた他学年の児童の感想からは、一部に「言葉が難しい」という表現も見られたが、演技からストーリーを読み取ることができていたため、総じて観客は楽しんで鑑賞できていたようであった。このことから、狂言のおもしろさのある程度、全校児童に伝えることができたのではないかと考える。

さらに、6年生の中には発表後の授業で3年生の狂言について、「最後のあいさつの『これ^レで3年生のくさびらを終わります』⁹も、狂言っぽく言っていた」と発言した児童がおり、「2字目を張る」という狂言セリフの特徴が観客に伝わっていたことが窺えた。

4. 発達段階に応じた狂言教材の提案

この「くさびら」の実践を通して、表現することを楽しめる小学校中学年での狂言指導の可能性が確認されたが、狂言そのものは他の伝統芸能と比較すると、年齢を問わず指導の可能性のある芸能であると考えられる。

児童と楽しんで狂言を創り上げるために、教材として選択する狂言曲の条件としては、①話がわかりやすい、②ユーモアにあふれている、③太郎冠者物・鬼物・山伏物、④擬音・狂言面がある曲である、という諸点が考えられる。

表2に、「くさびら」の指導実践の考察を通して考えた各学年で扱える狂言教材例を提示する。

このうち創作活動で制作するものに関しては、実際の舞台で使用しているものに限らず、児童や教師の発想を大切に、より楽しく狂言表現活動ができるよう自由に制作することを提案する。

「茸」以外の狂言曲はすべて2～3人で演じる曲である。これらの曲に学級で取り組む場合、演者数の面

表2 小学校における表現教材としての狂言例

	曲名・分類(※1)	擬音	狂言面	創作活動例	推奨理由
低学年	「蝸牛」 山伏物	無	無	山伏の結袈裟、頭襟、法螺貝、太郎冠者の腰帯。四隅に柱を立て、かたつむりを留まらせてもよい。	太郎冠者をからかう山伏のいたづらがおもしろく、そのやりとりのしぐさは低学年でも楽しんで表現することができる。終盤は舞をとまなうにぎやかな囃子物がある。
	「神鳴」 鬼物	有	有	医師のもつ針、神鳴の角。雲や、稲妻を制作するのよい。	神鳴の腰に針を刺す場面がおもしろく、顔の表情も表現しやすい。神鳴が地上に落ちてくる場面に楽器を合わせたり、登場の仕方を考えたり、創意工夫しやすい曲である。
中学年	「茸」 山伏物	無	有	山伏の篠懸、頭襟、法螺貝、茸の傘と面、四隅の柱の代わりに茸を置いてもよい。	登場人物が多いのが特徴。茸の所作がおもしろく、演じるには中学年が望ましい(※2)。山伏の呪文に楽器を合わせたりできる。しかし、演者が多いため立ち稽古は少々大変である。
	「節分」 鬼物	有	有	鬼の面・隠れ蓑・隠れ笠・打ち出の小槌など。	児童にとって身近な行事であるため、親しみやすい。人間の様々な表情を表現することができる。
高学年	「柿山伏」 山伏物	有	無	山伏の篠懸、頭襟、法螺貝、山伏が乗る台。ワキ柱を柿の木に見立てて柿の折り紙をつけてもよい。	年間上演回数が多く光村図書国語科6年の教科書に掲載されている。山伏と柿主とのやりとり、山伏の所作や擬音の表現がおもしろい。
	「附子」 太郎冠者物	有	無	太郎冠者の腰帯、猛毒の入った壺の制作。掛け軸や茶碗を制作してもよい。	年間上演回数が多く教育出版国語科5年の教科書に掲載されている。ストーリー一性があり、それぞれの場面での太郎・次郎冠者の所作や擬音の表現がおもしろい。

※1 分類は、『狂言集上』(小山弘志校注 古典文学大系42 岩波書店 昭和35年)、『狂言集』(北川志彦・安田章校注 古典文学全集35 小学館 昭和47年)を参考にした。

※2 茸の所作は脚力を伴うので低学年では難しいと予想する。反対に高学年ではひざや足に体重がかかり、かなりの負担が生じると考える。

で工夫が必要である。そこで、全員で演じるために1役を複数の児童で演じるようにし、曲の途中で演者を交替させるなどの配慮が必要であろう。指導の初期の段階で行うセリフの稽古を全員で行っていれば、どの場面でもすべての役に参加できるようになるはずである。また、心理的・身体的な面で演じることが困難な児童には、謡や楽器演奏で参加させることも可能であろう。

さらに、狂言はセリフ劇であるが、ナレーションを入れた方が話がわかりやすい場合には、ナレーション部分を加えるなどの工夫がされてもよいと考える。

5. おわりに

狂言は、ナレーションのないセリフ劇である。セリフと所作のみで、場面の様子や、話の展開を伝えなければならない。セリフの掛け合い、「間」の取り方、声量、言葉の明瞭な発音、抑揚、母音の長短、リズム、所作による身体表現、これらすべてが習得され、有機的に関連づけられなければうまく演じることができない。

勿論、これらのことは1ヶ月程度で習得できることではないが、本実践では言語・身体・創作活動を通して総合的に狂言を習得したことから、狂言のおもしろさを自らの体験によって感じ取ることができたと言える。

この実践を通して、児童自らが演じることにより、昔の言葉にも自然になじみ、「難しい」という感覚を持たず、狂言の奥深い入り口に容易に立つことができる

ことがわかった。

「2字目を張る」、「ゆっくりしゃべる」、「歩き方をまねる」という3点を約束事として表現するだけで、ある程度、狂言風に仕上げることができるため、小学校における「伝統的な言語文化」活動の教材として、狂言は大きな可能性を秘めていると考える。

謝辞：研究にあたっては小学校における狂言活動の指導経験をお持ちの矢島綾子教諭(松本市立本郷小学校)から多くのご教示を頂きました。心よりお礼申し上げます。また本実践の対象クラスの担任であった北山力也教諭のご協力に対しても感謝申し上げます。

注

- 1 嶋田は既に保育園での狂言「蝸牛」を扱った総合的な表現活動の実践報告を行っている。「(ことば遊びから狂言『蝸牛』へ - 語ることから広がる保育の総合的な表現活動 -」(『和歌山大学教育学部紀要 - 人文科学 -』第61集 2011年2月参照。)
- 2 本実践で扱った「くさびら」とは「きのこ」のことであり、和泉流では「茸」、大蔵流では「菌」と曲名の表記が異なる。
- 3 今回は指導者が狂言絵本に合わせて、発表用台本を作成したため、本実践内では狂言曲名を絵本に倣い「くさびら」とひらがな表記にした。
- 4 実際の狂言では、男は腰帯をしないが、今回は、山伏と小道具の数をそろえるため、狂言師には必要な腰帯をつけることにした。
- 5 狂言絵本では、鬼茸は「おばけくさびら」として登場する。このキャラクターの方がより作品に親しみを持つことがで

- きると判断し、今回の狂言発表では「おばけくさびら」を登場させた。
- 6 野村萬斎 (2003) 『野村萬斎What is 狂言?』檜書店参照。
野村は、「『2字目を張る』といって、2音節目を強調して抑揚をつけることによって、観客にセリフがより明確に伝わります。」(p.32) と述べている。
 - 7 『野村萬斎What is 狂言?』(野村萬斎 檜書店 2003) に基づいて、セリフの言葉を発することを「しゃべる」と表記した。
 - 8 野村萬斎 (2003) 『野村萬斎What is 狂言?』檜書店 p.60 参照。
 - 9 「2字目を張る」箇所の文字を□で囲んだ。